

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

つれづれ
インタビュー
マンガびと

2

高岡凡太郎

プロフィール

たかおか ぼんたろう。1950年愛媛県生まれ。愛媛県立野村高等学校畜産科卒業。少年画報社新人賞の「高校真夜中派」でデビュー。集英社少年ジャンプ第2回手塚賞を「ガキすて山」で受賞。



演芸場



漫画雑誌に投稿する日々

〜文通仲間が漫画家への道を開いてくれた

僕は女きょうだいの中で育ったので、「ボクちゃん」って言われていたんです(笑)。それが近所の子にも広がっちゃいましたね。あるとき、学校で近所の子が僕を見て「ボクちゃん」って呼んだんですけど、そばにいた別の子が「ボンちゃん」と聞き間違えたみたいで。それ以来、僕のあだ名は「ボンちゃん」になったんです。ペンネームが「凡太郎」なのは、そういうわけ。

漫画が好きになったのは、小学校の低学年の頃でしたね。確か「少年マガジン」や「少年サンデー」が創刊されるちよつと前のことです。愛媛県の小さな田舎の町だったんですけど、貸本屋が5、6軒も



あつたんですよ。「少年」「冒険王」や「おもしろブック」などを借りて読んでいたのを覚えてます。なかでも『赤銅鈴之助』が好きで、よく似顔絵を描いていました。

当時の漫画雑誌には必ず投稿コーナーがあったので、漫画のキャラクターの似顔絵を描いて送っていました。ちょうどその頃、やなせたかしと立川談志が司会をしていたNHKの「まんが学校」という番組にもヒトコマ漫画を投稿して、テレビに自分の描いた漫画が紹介されたこともありました。そのときは中学校の先生も見っていて、

「おい高岡、紹介されたな」と言われたりして。

当時、つのだじろうさんが「一日一漫」と言っていたんです。つまり、漫画家になりたい人は1日に1本4コマ漫画を描けと。4コマをずっとつなげたものがストーリー漫画なんだから、1日に1本描くべきだつて。それが漫画家になる近道だと。だから高校生のときに毎日4コマ漫画を描いていたんです。その頃、4コマ漫画って新聞ぐらいにしか載っていなかったんだけど、のちに4コマ漫画ブームが来たときに、このときの経験はちよつと役立つんじゃないかと思えます。

でも愛媛の片田舎に住んでましたから、漫画家になろうとしても、その方法がわかんなかった。ほんとに遠い世界のことだと思っっていました。

になれるかもしれないと。

ただ、ずっと漫画雑誌に投稿していたので、そのページを見ていると、自分のような常連がいるんですね。「あ、この人また載ってる！」みたいな。それで、常連の人と文通を始めたんです。文通の相手は、新宅よしみつ君といって、のちに『トリプルファイター』や『小さな巨人ミクロマン』を描いた人でした。その新宅君が高校1年のときにいきなり退学して、『スーパージェッター』で有名な久松文雄さんのアシスタントになったんですよ。そのニュースを聞いて、それまで遠いと思っていた漫画家の世界が急に身近に感じられました。ひよつとしたら、自分も漫画家

高校2年のとき、修学旅行で東京に行っただです。そのときに初めて新宅君に会いました。ええ。その頃には自分は漫画家になろうと決心していました。なので、高校3年の夏休みに、東京にある新宅君のアパートに転がりこんだんです。東京には姉がいたので、そこに行くという名目で東京に行っただですけど、全然姉のところには行かなかった(笑)。

新宅君のアパートには、いろんな人がやってきましたね。僕のような漫画家の卵もいれば、同人誌の仲間もいたりしました。あるとき、夜中に貝塚ひろしさんがアシスタントを連れてやってきたんです。貝塚さんは当時、漫画家の卵を集めて機関誌を作っていたんです。新宅君はその機関誌と

関係があったので、その流れで貝塚さんと会ったわけです。

貝塚さんはちょうど「少年ジャンプ」で『父の魂』を描いていた頃で、アシスタントはのちに『ど根性ガエル』を描いた吉沢やすみさんでした。実は僕、吉沢さんのことは知っていたんです。「まんがマニア」という投稿誌（貝塚ひろしさんが発行していた）に描いていて、その優等生でした。吉沢さんは、貝塚さんに見出されて、アシスタントをするようになったと聞いています。

貝塚さんとは初めてお会いしたんですが、なぜか僕のことを「内田君」って呼ぶんです。よくよく聞くと、当時「少年マガジン」の編集長が「内田」という人で、その人が僕とよく似ていたみ

たいで、顔をすぐ覚えてもらったんです。それで貝塚さんに「高校を卒業したら漫画家になりたい」と言ったら、「じゃあうちに来るか」と。それが漫画家になるきっかけでした。



アシスタントを経て21歳で手塚賞
少年誌から青年誌へ

夏休みが終わり、秋になって10月ごろ吉沢さんから手紙が来たんです。「貝塚先生が逃げた！」って（笑）。よく漫画家が逃げる、って言いますけど、仕事一杯だったのか、ノイローゼになったのか知らないけど、結局貝塚さんのアシスタントにはなれませんでした。

それで高校を卒業して一か月ぐらいブラブラしてただけで、石井いさみさんからハガキが

来たんです。そう、『750ライダー』の石井さんです。ハガキには「もし東京のお姉さんのところに来る機会があったら、顔を出してほしい」と書いてありました。石井さんは貝塚さんと交流

があつた人だつたんですけど、どうして僕にハガキをくれたのかわかんなかった。そのハガキには「手塚プロの鈴木氏が高岡君のことを褒めてます」とも書かれていて。でも僕は、その鈴木さんとも、石井さんとも面識がなかつたんです。たぶん、新宅君がいろいろと気を回してくれたんだと

思います。彼は手塚プロともつながりがありましたから。すごくラッキーでしたね。

石井さんは『くたばれ!! 涙くん』を描いていた頃で、僕と同年代のアシスタントにはあだち充さんがいました。今考えると、すごい人たちがいたんだなと思います。でも、結局3か月ぐらいしかいかなかったんじゃないかな。やっぱり自分の漫画が描きたいという気持ちが強くなったというか。当時の僕の目標は、高校を出て4年でなんとか漫画で生活できる

ムスメ日記第一巻より



ようになることだつたんです。つまり、大学生が卒業して社会人になる頃には、こつちも漫画で飯を食えるようになれば



査委員の受けは良かったけど、子供向けの話じゃなかったなと。

その頃は新人にどんな描かせてくれた時代でした。手塚賞には

いいんじゃないかと。それでアルバイトをしたり、吉沢さんの手伝いをしたりして、いろいろ描いているうちに、手塚賞をもらうことになったんです。

手塚賞は正確に言うと、第2回の準入选でした。『ガキすて山』という作品で。当時は公害が問題になっていたので、大人たちが子供を山に連れて行って、そこで育てるというストーリーだったんです。ちょっと社会風刺があったかな。審

第3回にも応募してその時は佳作でしたが、審査結果発表の記事が「月刊少年ジャンプ」に出たときに、「高岡先生、新連載！」という予告が書いてありましたからね。僕、全然知らなかったんですよ(笑)。あと少年画報社でも新人賞をもらったんですけど、すぐ「別冊少年キング」で描かせてもらえましたね。だから2年で漫画家として何とかやっていけるようになりました。短大を出た人と同じぐらいかなと。まあ、そんな調子だったんですけど、「少年チャンピオン」でも連

載させてくれたんです。『レターマン』というタイトルです。10回ぐらいで終わっちゃいましたけど。

あるとき少年誌に作品を持ち込んだら、編集者に「面白いけど、少年誌にはちよつと向かないね」と言われたことがあったんです。それで青年誌の「漫画サンデー」の新人賞に応募したら選考に残りました。それで描かせてくれるようになったんです。そのあと「週刊ゴラク」とか「週刊漫画」といった青年誌に移っていきました。それが25歳から28歳ぐらいのときでしたね。

プロレスが好きだったので、プロレス漫画を描いたりしていました。あんまり編集者からの注文もなく、好きな漫画を描いていた気がします。30歳ぐらいになったときに、「漫画サンデー」の

編集者から、日刊スポーツで野球漫画が描ける人を探しているから、やってみないかと。新聞で毎日漫画を載せるわけだから、大変だったけど、おかげさまで生活が安定しました。



代表作『ムスメ日記』
娘にこの良さがわかるのはまだ先

結婚したのは34歳のときでした。馴れ初めですか？ いや別に大したことはなくて、僕、落語が好きで、当時三遊亭ぬう生（現・円丈）の追っかけをしてたんです。ライブのあとでファンが集まってお酒を飲む会があったときに、参加していた人の中に妻がいて。彼女は音楽雑誌の編集者でした。漫画家という職業もある程度わかっていて人でしたね。まあそれで結婚したというわけはないんだけど（笑）。

も恥ずかしい。今回、インタビューを受けるにあたってパラパラとながめ直してみたんですけど、「ああ、こういうことがあったんだな」という貴重な記録になつていっているのか。ただ、娘たちからすると、自分の恥ずかしいことが描かれていると思つちやうみたいです。

そういえば下の娘が幼稚園に入った頃、公園に二人で行ったら、浅い池みたいなのところがあつたんですよ。そこに落ち葉がたくさん浮かんでいて、陸地みたいに見えたみたいで、娘が入ったらざぶんと落ちちゃったんです。それを漫画に描いたら、「こういうことは描かないで」と泣かれたことがあつて、確かにそうなのかなと。

『ムスメ日記』の続きを描いてほしい、と言われすることはあるんですけどね。でも、娘たちも中学

生ぐらいになると、話しかけるだけでも機嫌が悪くなりますから(笑)。こつちも腹が立つので、まあ止め時だったかな。

娘ですか？ 上が23歳で下が21歳になりました。社会人と大学生です。『ムスメ日記』のことは全く話さないですね。私も含めてわが家ではだれも読み返したりしないし、もう完全に過去の漫画です。



興味のあることを描いてきただけ
くいまだにアマチュア気分が抜けない

漫画を描かなくなつて、もう3年ぐらい経ちます。別に筆を折つたというわけではないんですけど、あまり仕事したくないな、というのが本音です。まあ充電期間ということにしておいてください(笑)。

んだつたなど。そういうスタンスが良かったと言われることもありますけど。

なんだかずつとアマチュア気分が抜けないんですよ。オトナになれなかったというか。何が何でも面白い漫画を描いて、出版社を儲けさせて自分も金持ちになるんだという考えはまったくなかった。なんとなく自分の興味のあることを漫画に描ければいいという程度でした。

『ムスメ日記』に妻が入院したエピソードがあるんですけど、そのときは、他の連載を休ませてもらいましたからね。娘たちは聞き分けのない頃だったし、子供を寝かしつけたあと、漫画を描く根性はなかったもので(笑)。今思い起こしても、自分は甘ちゃ



'84一発ギャグ転
日刊スポーツ刊



今後、漫画を描くとしたら...? 単行本が何度も増刷され、テレビアニメになり、キャラクター商品がいっぱい売れるような漫画ですかね。できるなら「アトム」や「ドラえもん」「サザエさん」みたいに、作者が亡くなった後でも利益を生みだして、家族が食っていけるような漫画です。まあ、それが簡単に描ければ漫画家だれも苦労はしないんですけどね(笑)。

僕はずっとギャグ漫画を描いてきましたから、笑いというものに興味があつたんです。落語が好きなのもそうだし、お笑い系の芝居を見たりして、笑うということは、どういうことなんだろうと考えるのが好きでした。だからたまにいい

アイディアが浮かぶことがあるんでしよう。今日も、寄席に行つてきた帰りだし(笑)。

●インタビューを終えて

淡々と自分の漫画家人生を振り返っていた高岡さん。何度も「自分はアマチュアだから」と繰り返していましたが、『ムスメ日記』を始めとする作品群は、まぎれもないプロの技を堪能できます。次回作を待っているファンが多いのも、その確かな腕があるから、だと思えます。

文／中島泰司

2009年6月30日

池袋演芸場近くの喫茶店にて